

本館所蔵の音盤資料について (I)

—坂井徳治氏収集資料を中心に—

佐藤 宥紹^{*}

Notes on the Collection of Records in Kushiro Municipal Museum I — the main object of records collected by Tokuji Sakai —

Hirotsugu Satô

1. 資料収蔵の経過
2. 資料の概要
 - (1) 保存状況と資料評価
 - (2) 資料の種別と概要
 - (3) 音盤の製作会社 (以上本号)
 - (4) 音盤の製作年代 (別途掲載)
3. 坂井家小史
4. 音盤目録

1. 資料収蔵の経過

本館所蔵の音盤資料(レコード)はおおよそ2,500点である。このうち、これまでに収蔵された1,200点については、すでに本館職員西幸隆によって整理が行なわれている。ここに紹介する1,347点の音盤は、1979年4月市立釧路図書館より本館へ保管転換を受けたもので、この多くは、故坂井徳治氏が収集したものとみられている。本資料は市立図書館が所蔵する以前、釧路市公民館が寄付採納するという、二度にわたる所管替えを経て、本博物館に委ねられたものであり、この過程で加味された資料を含んでいることは確かであり、全ての資料が坂井家から寄贈されたままで保存されてあったとは認めがたい。

北海道新聞の昭和33年8月13日号によれば、大正期～昭和初期にかけ釧路港を舞台に木材貿易商を営んだ坂井徳治氏(昭和22年8月故人となる)の長男坂井統一氏より釧路市公民館に木箱30余箱に納めたレコード約2,000枚が寄贈されたと報じている。その目録もない現在では、その全容も明らかにできず、かつまた非常に破損しやすい性格の資料であるところから、失われたものも少なくはないのだが、発盤年代や坂井徳治氏のレコード収集の時期からみて、かなり多くの部分が保存されているとみることもできる。

1955～60年ころからレコード再生方法に大きな変革があり、LP、EP、ドーナツ盤といった新型レコードが

市中で入手できるようになったことは記憶に新しい。演奏時間の延長だけでなく、音質や材質に著しい変化をみせた反面、SPと呼ばれた78回転/M盤は姿を消すこととなった。この頃から旧蔵資料として一方で破壊が進み、他方で公共施設への保管がすすめられ、いわゆるSP盤資料のストックが増加することになり、他家資料が混入することにもなったわけである。博物館では保管転換後

1) 雑音など再生法上では難点があるものの、すでに消滅して保存されていない音盤が含まれている場合には、音譜や演奏評論としてしかたどることのできない演奏をナマで聞けるということから、演奏方法や、演奏機器の変遷をたどることのできる音楽史、演奏史上の資料として貴重なものとなるであろう。

2) 博物館が行う展示や、教育普及事業の資料としての利用が考えられるであろう。政党史ではよく知られている大隈重信²⁾や司法大臣尾崎行雄の演説が含まれていたことは、そのような意義を高めるものとして位置づけることができる。

3) この資料は、さきに述べたように木材貿易商坂井徳治氏の旧蔵資料が多く含まれており、その点からすれば、取扱い商品である輸出鉄道枕木材を一方の柱として展開した明治末期から大正後半期の釧路港貿易の推移と深いかかわりを持っており、かつまた憲政会派の市議や商工会議所会頭としても地方政治経済にかかわった所蔵者自身を理解する資料にも活用できる。

4) レコード会社の発盤リストをたどることにより、選曲や構成(シリーズの)を通じて「時代のうねり(趨勢)や世論背景をたどることができると考えられる。いわば「歌は世につれ、世は歌につれ」とすれば世相を反映したものであるはずであり、社会や生活にも関わる資料となる。

などの点を考慮して、この資料の整理と分類を行うこととしたものである。なお、この資料の整理にあたっては、日本放送協会放送文化財ライブラリーのみなさん

* 釧路市埋蔵文化財調査センター

に懇なご指導をいただいた。また整理作業に関しては、釧路市埋蔵文化財調査センターの中村嘉代子、増子さゆり両氏にお手伝いをいただいた。それぞれ銘記して、厚くお礼申し上げます。

注1 LPの出現は1948（昭和23）年であり、国内では1951～52年ころから一部に使用されはじめたという。ドーナツ盤は1949～50（昭和24～25）年からとみられる。Hi-Fiと呼ばれた時期を経てステレオは1958（昭和33）年ごろから発売された。竹針、鉄針にかわりダイヤモンド針が主流になるなど、この時期は大きな技術革新を経ており、バネの弾性を利用してモーターを回転させる方式の蓄音機もこの時期を境に姿を消し、電動モーターによる低速、安定回転が得られるようになった。

注2 大隈重信「憲政ニ於ケル輿論ノ勢力」（日本ノホン 510～515）、尾崎行雄「司法大司尾崎行雄演説」（オリエント 924～933）。大隈は1914（大正3）年4月16日立憲同志会の推せんを得て早稲田大学総長から第二次大隈内閣を組織し、司法大臣には尾崎行雄をすえた。（～1916. 10. 4）。「帝国議會は解散されました……」に始まる大隈の演説は、衆議院議員選挙にあたり、地方遊説のかわりに演説を吹きこんで同志に送ったもので、早稲田大学の校友会を通じ、かなりの量が地方にばらまかれた、ということである。（『朝日新聞』昭和55年2月10日付 など参照）

2. 資料の概要

(1) 保存状況と資料評価

レコードは17個の木箱ケースと4個の皮革張（内側はビロード様布地張）ケースにおさまっているもののほかは、段ボール箱に梱包されてあったので、これをプラスチック製整理箱に収納し、それぞれに便宜的に整理番号を付した。木箱には、1（整理番号―表―1の番号―12）、2（同4）、6（同20）、7（同16）、10（同5）、12（同17）、15（同18）、17（同2）、19（同7）、20（同9）、22（同34）、23（同15）、24（同13）、26（同19）、27（同1）、29（同10）、32（同3）の番号が墨書してある。これらの箱に収容されたレコードの枚数は671枚である。最終番号が32であるから木箱そのものにすれば15個が欠落である。皮革製ケースは整理番号の6、8、11、14番で、これらの枚数は91枚である。その他のレコードは一括して585枚となり、あわせて1,347枚となる。

ラベルを貼った中央部がやや凸状になる、いわば唐筭状のゆがみ（ソリ）があるが、キズ、カビ、ヒビや、かけているものは8.3%程度。保存状態は比較的良好と思えるし、資料としての生命である再生状況についても、この種のレコードの通例として雑音（ノイズ）を含んでいるものの、周波数ごとに補正を加えるとかなり良い音が得られる。個別に著しい差があるものの、絶望的な状態ではないとされている。

邦楽関係のレコードとしては、東京国立文化財研究所が購入整理した神戸の安原仙三郎氏所蔵のもの¹⁾ 6,000枚

や、日本放送協会（NHK）放送文化財ライブラリーが²⁾複製記録している田辺尚雄、秀雄氏の収藏品 1,200枚などの事例というように、管見の及ばない故に保存や整理の実態を把握できないだけで、多くの収藏品や整理が各地で進んでいるのであろう。しかし、道内で明治末期から大正にかかる一定の時期に発盤されたレコードが、大量にしかもまとまって保存されていた例はそれほど多くはないであろう。たまたまそれらの時期が、釧路港の貿易のうで、鉄道枕木材、木材が雑穀とならぶ輸出品の代表となっており、取扱商人としての坂井家に蓄積されたものというつながりのほかに、その後も戦災などの災禍を免れてきたことが、この釧路で保存され、活用の途を開くことになったものでもある。

資料を形式のうえからみると、SP盤としてはオーソドックスな25cm盤のほか、片面盤や、短時間演奏用の13cm～19cm程度の小型盤などがあり、また長時間盤ともいう30cmのものも1枚ある。形式変遷をたどるうえで意義があろう。また演奏技術や演奏方法、楽器等の推移についてたどろうとする点からすれば、それは前述のように演奏可能な音盤が、しかも再生するうえで支障が少い状況で保存されていることは、たいへん意義がある。

内容に関しては引き続き素描するが、組盤（続きもの）が比較的散失しないで残っていることも、この資料の評価を高めている。

なおレーベルの分類までは手がまわらなかった。

注1 明治・大正・昭和に刊行された各種邦楽レコードを網羅し4,000枚を義太夫節で占める。本流義太夫、女義太夫、素人義太夫などにわけられる諸名人の演奏が含まれる。『音盤目録 I』はその報告書となっている。

注2 田辺氏は東洋音楽研究の先駆者で、明治時代の輸入SP盤と大正中期の古典保存会盤が特筆されるもので、洋楽はなく雅楽、邦楽が多いということである。（『文研月報』 昭55. 1 P.68）。坂井家コレクションには雅楽、声明、能楽など古代、中世期に生まれた古典音楽はなく、江戸・明治に創造、発展した邦楽が多い。

(2) 資料の種目と概要

資料の分類については、東京国立文化財研究所が行った¹⁾分類体系を参考にさせてもらいながら、1. 鳴物、2. 音曲、3. 唄物、4. 劇、5. 語物、6. 民俗芸能、7. 西洋音楽、8. その他の八項に大別して整理することにした。整理の結果 1,347枚に達することが判明した。このレコード資料の内容は、表―1としてまとめおいた。浪花節が192枚、義太夫節 155枚、小唄、流行小唄、流行唄とレーベル表示されているものについては、演奏者、曲名からして俗曲としたことで 131枚、長唄 121枚が圧倒的に多い分類を占め、以下、洋楽 81、俚（民）謡 68、清元 56、歌舞伎劇 52と続く。

表-1-1 整理箱別種別一覽

[illegible]

表-2 種別発盤会社一覧

[illegible]

表-3 日本蓄音器商會音盤番号100別分布枚数

		式 日本國自來水及排水事業 14,000万円収支									
		0	1,000	2,000	3,000	4,000	5,000	6,000	7,000	8,000	9,000
1 ~	7				13		5				7
101 ~	5	5	5	—	23	2	8	—	—	—	2
201 ~	9	1	1	8	26	23	13	—	—	—	8
301 ~	6	1	1	3	23	12	5	—	—	—	—
401 ~	13	3	3		35	9	—	—	—	—	—
501 ~	3	1	12	34	22	—	—	—	—	7	—
601 ~	5	5	16	29	22	1	12	—	—	—	—
701 ~	12	7	28	25	19	—	—	—	—	—	—
801 ~	28	3	4	18	11	—	—	—	—	—	—
901 ~	38	3	1	37	1	—	—	—	—	—	—
計	117	31	103	267	121	53	—	—	—	—	5

I 鳴物

鳴物としたのは箏曲、尺八、薩摩・筑前琵琶などで、121枚である。箏曲には三曲一琴、三味線、尺八または胡弓—も含めてある（箏曲—9、三曲—14、計23）。

箏曲の「日本ノホン」は2,500番台に菊原揆按、中尾都山の組み合わせで「摘草1～4」、3,100番台に米川輝寿「きぬた1～4」、4,200番台で宮城道雄、「水の変態 上、下」「初鶯、秋の夜」、三曲では3,100番台に米川親敏、「夜々の星」、また「日本ノホン」「アメリカン」に「六段」がある。「水の変態」は宮城道雄の処女作で明治42年の作曲という。このレコードは、大正中～後期のものであろうか。

琵琶は室町時代の末頃、薩摩の島津家が当時の武士の士風を鼓舞する目的で盲僧の淵脇壽長院に作曲させ、武士達に歌わせたのがはじまりであるとされている。明治維新後薩長の東京進出により薩摩琵琶も、郷土音楽を脱し全国的に普及することになる。東京進出に関係した吉水経知（錦翁）（明治11年上京）の1枚、東京風に改めた永田錦心の代表作「本能寺」など37枚が含まれている。前者は「川中島」（コロムビア 2,342 番 片面）、後者には、明治天皇（メノホン 863～866）、鳴呼乃木將軍（メノホン 860～862）、乃木將軍（日本ノホン 1908～1914）、尼港の嵐（ヒコーキ 4639～4642）、橋大隊長（日本ノホン 1611）などの時代ものがまとまっている。錦心の作風のみならず、そのテーマも多くの人をひきつけ、錦心流の祖として、薩摩琵琶を全国的に拡大したのであろう。「日本ノホン」盤では、200番台に1枚、1,000番台に10枚、3,000番台に3枚である。錦心は昭和2年43才で死去した。

いっぽう筑前琵琶は、明治期になってから北九州地方にあった盲人の門付琵琶に三味線の手を応用してできたもので、橘智定（旭翁）や吉田竹子らが創始者。まとまったところでは明治時代の代表的な演奏家である高峰筑風が8枚、豊田旭穰15枚、江馬旭子8枚、高野旭嵐4枚がある。組合せ物は高峰に「那須野與市1～4」「義士の討入1～4」、豊田に「川中島1～6」、「長良堤1～4」、江馬に「小督局1～6」、「四條畷1～4」、「本能寺1～6」、高野に「頂羽1～8」がある。「日本ノホン」で4,000番台の江馬はともかくとして、演奏や録音上興味あるものが含まれているようである。

II 音曲

浄瑠璃、義太夫、一中節、常盤津、新内、清元を音曲とし、296枚が該当する。平曲や謡曲などを源流にした浄瑠璃から派生したものを一括した。時期的には義太夫節→元禄、新内→安永前後、清元→文化頃から始まった⁴⁾。

浄瑠璃は竹本綴太夫（しころだゆう）の「忠臣蔵六段目 1～6」「新口村 1～4」「千両轢 1～4」の7枚でいずれもオリエントレコードである。ついで竹本朝太夫が「野崎連引 1～2」「阿古屋琴貢 1～6」でライロホン製。豊竹呂昇には「三勝酒屋1～3」「先代萩1～2」「三十三間堂」がある。豊竹呂昇は明治の女義太夫の第一人者で、「壺坂」などの代表作があるが、この資料には含まれていない。

浄瑠璃と義太夫の演奏者は重なることが少くない。綴太夫（本）が8枚、豊竹呂昇（女）が27枚、竹本長広（女）—3枚が義太夫にもある。竹本系統では小大佐（女）、錦太夫（本）、小豊後（女）、七五三之助（女）、廣春（女）、綾之助（女）、綾香、弥太夫（本）、雛太夫（本）、春子太夫（本）、大隅太夫（本）、昇太夫（本）、源太夫（本）、東朔、津太夫（本）、友之助（女）、京子（女）、豊竹系統は和広（女）、時太夫（本）、駒太夫（本）、古靱太夫（本）、（こうつばたゆう）、他に神戸中検芸妓連、殿太夫（竹本か 本）、豊澤新左衛門のあわせて25組ある。本流義太夫、女流義太夫は比較的著名な者を含んでいるが、素人義太夫はあまり知られていない事例で占められている⁵⁾。

まとまって残っているものに「勧進帳1～10」（神戸中検芸妓連）「朝顔日記1～8、1～6」（竹本源太夫）「寺子屋1～6」「雙仇討三人上戸1～6」（同上）、また竹本津太夫では「忠臣蔵六段目1～8」「沼津1～6」「逆魯の段1～6」「紙治1～6」、古靱太夫の「伊賀越1～4」「日吉丸1～6」「紙治1～6」「大功記十段目1～20」が揃っており、義太夫が4,000枚を占めるという安原コレクションのなかにも見あたらない題名のものがあり、貴重な録音といえるかも知れない。

常盤津は松尾太夫が29枚、和歌太夫が7枚、佐喜太夫が5枚、かわったところではのちに落語家として知られこの所蔵盤でも「嘘つき」「六尺棒」といった落語を残す、柳家小さんの「乗合舟（-X-）」も含まれている。常盤津の代表作「積戀雪閑扉」は和歌太夫（1～8）、松尾太夫（1～12）にそれぞれ残されているが、松尾太夫の「将門」は6枚組のうち、(1)～(4)の2枚が欠落している。

新内は富士松加賀太夫、鶴賀宮古太夫、鶴賀尾登太夫の三人、清元は喜久太夫が最も多く51枚を占める。文化・文政時代の名曲「北洲」「保名」（それぞれ1～6）や「かねさ」（1～10）などがある。

III 唄物

箏曲と合流して上方地方で独自に発達したものの総称である地唄と、地唄から派生した長唄、大薩摩節、謡曲芝居囃子、喘唄、小唄、うた澤を一括した。ただ小唄、流行唄、流行小唄とあるものは、115枚となっているが、

内容からして俗曲として扱うのが適当と考え、赤坂小梅ほか「峠、大原女」のみを小唄とした。

長唄が最も多く、121枚。演奏者別では中村兵蔵3枚、松島庄十郎7枚、吉住小三蔵3枚、芳村伊十郎43枚、芳村孝次郎41枚、九代芳村伊四郎3枚、杵屋東十郎4枚、中村六三郎3枚などがある。化政時代の長唄の名曲といえば「越後獅子」があげられるが、芳村孝次郎の3枚(1～6)にみられる。このほか、庄十郎に「四季の山姥1～8」、伊十郎に「橋弁慶1～8」「石橋1～10」、「連獅子1～6」「鶴亀1～6」「隈取安宅松1～8」「筑摩川1～4」「犬神1～6」「勧進帳1～10」、孝次郎に「都鳥1～4」「賤機帯1～8」「秋色種1～8」「鞍馬山1～6」「老松1～6」「娘道成寺1～4」「綱館段1～8」、九代伊四郎の「浅妻船1～6」(踊用長唄)、東十郎の「執着獅子1～8」がシリーズものとしてそろっている。日本ノホン盤の番号でいくと、兵蔵—600番台、庄十郎2,800～2,900番台、伊十郎は1～2番と3,560番以降3,919番までの間と4,705～4,708番及び5,700番台にある。まず1～2番は時期的には明治末期までさかのぼり、3,600番台が大正8年、3,890番台で大正9年の製作と考えられる。量的には3,000番台28枚、4,000番台2枚、5,000番台3枚で、大正中期に製作されたものが多い。孝次郎は900番台8枚、2,700番台6枚、3,200番台7枚、3,900番台3枚、4,200番台8枚、4,600～4,800番台3枚と散在している。このように番号をたどっていくと、大正期を通じての長唄を代表する伊十郎や孝次郎による古典的な出し物が録音されていることになるといってもよいかもしれない。

囃は、長唄系の中村兵蔵、吉住小三蔵と、浄瑠璃系の喜久太夫(清元)、和歌太夫(常盤津)の三流がはいっている。うた澤は寅右衛門(歌澤)が6枚、分派した芝派(哥澤)が4枚あって、これには芝金、芝士心、芝士香らがある。寅右衛門派は日本ノホン盤で2,700番台、芝派はライロホン、メノホン、スヒックスからの発盤。

IV 劇

歌舞伎劇、田劇、新派劇など69枚であるが歌舞伎劇が70%強を占める。市村羽左衛門、中村雁治郎、松本幸四郎のほか、尾上梅幸の出演するものが28枚ある。日本ノホンの音盤番号で4,000番、5,000番台に34枚が集中し、9,000番台に8枚ある。大正10年あたり以後昭和初期にかけての録音と思われる。シリーズとしては尾上梅幸、市村羽左衛門の「興話情浮名櫛1～14」「伊勢宮頭恋寝刈1～14」、(1枚破損)尾上卯三郎「彌作の鎌腹1～6」、中村雁治郎「心中天網島—煙燵の場—1～8」がある。

田劇は澤村宗十郎の「俠客春雨傘1～6」の3枚。

V 語り物

浪花節、落語、講談、万才、声色(声帯模写)、活弁の6種類、245枚。このうち浪花節が192枚を占める。

浪花節の語り手としては吉田奈良丸38枚、桃中軒雲右衛門17枚、幣甲齊虎丸32枚、天中軒雲月9枚、篠田實10枚。比較的新しい(昭和初期～第二次世界大戦)春日井梅鶯6枚などがある。日露戦争後、浪曲は忠君愛国をテーマとして、国粹主義の時流に乗り急速な発展をとげる。この関東側の代表が桃中軒雲右衛門であり、赤穂義士伝もので売り出した。「岡野金右衛門繪圖取(一)(二)」や「日蓮記1～4」が所蔵されている。いっぽう東の雲右衛門に対し、西では二代目吉田奈良丸が出ており、得意としたのは「大高源吾」などやはり義士伝ものであった。「大高源吾」に関するレコードは、篠田実の1枚と奈良丸の2枚(片面)が残されている。このほか、中山安兵衛、神崎與五郎、天野屋利兵衛、間重次郎、赤垣源蔵、大石妻子別れ、など義士伝に関するものが31枚もあって、他は義経、曾我兄弟、佐倉宗五郎、加藤清正といったものが1～2枚ずつある。雲右衛門と奈良丸はともに義士伝を語りながら、その芸風は前者が「剛健高尚」「雄渾豪快」と評されるものであったのに対し、後者は「艶麗優美」な節回しで売り出したという。武士道を鼓吹しながら浪曲の格式を向上させ、大道芸としてさげすまされていた浪曲の社会的地位を高め、近代浪曲を創唱した者と位置づけられている。⁶⁾

特に雲右衛門は社会風潮にあわせたテーマや内容の選択。寄席の高座から大劇場の舞台へと語る場を移し、折から国産化のはじまったレコードによって全国へその名を拡めたが、いっぽうではこの時期の浪花節の普及には政財界のなかにも支持する者があらわれ、その力も役立っていたとみられている。奈良丸や雲右衛門の輩出と活躍は、いっぽうで浪花節を大衆層から上層階級まで拡大し、他方で上層階級の独占物であったというか、その程度の支持層、保有層に限られていたレコードを一般大衆層にまで浸透させ、これを受けて、多くの国産レコード⁷⁾会社が名乗りをあげ、生産を開始することになる。雲右衛門については、日本ノホン、ライロホン、ロオイヤル、スタークトンの四種、奈良丸については、日本ノホン、オリエント、ロオイヤルのレコードが所蔵されている。

VI 民俗芸能

太神楽21枚、書生節14枚、俗曲131枚、俚謡68枚、下座囃子4枚、計238枚。

太神楽は豊年齊梅坊主連中、バンカラ新坊一座、小仙小金、竹治郎一座、新坊與三郎、港家新坊、港家小亀など。「日高川1～4」(新坊與三郎)、「七福神1～4

」（小仙、小金竹治郎）、住吉伊勢音頭（豊年齊梅坊主連中）などのほか「日露戦争盡し」など、世相にマッチしたものもある。

書生節は東京に集った苦学生がアルバイトに演歌を歌い、この称があるという。秋山楓谷、宮島郁舟、市川皖保に大別される。いずれも日本ノホン盤。

俗曲については、レコードに小唄、流行唄、流行小唄音曲などと記載されているものも含んだ。与治、春風亭柳、立花家橘之助、福高島若福、久の家登美子、石川家美代吉、界屋席なべ、かわったところでは天中軒雲月の「小唄」も所蔵されている。「二上り新内」「鴨緑江節」「新鴨緑江節」「都々逸」「磯節」「博多節」といった曲目が多数含まれている。民謡にあたる俚謡では「江差追分」「安来節」が多数のレコードをもつ。囃子は寄席囃子と芝居囃子に大別し、この項に含む下座囃子は寄席囃子をさす。

Ⅶ 西洋音楽

洋楽 81枚、流行歌 28枚、児童用唱歌など 47枚、あわせて 156枚。和洋合奏では帝国劇場楽手、テレフンケン和洋合奏団、日本蓄音器商会音楽部により、「秋色種」「元禄花見酒」「娘道成寺」「獅子はほんかいな」といった長唄の素材を、三味線と洋楽器（ピアノ、バイオリンなど）と組み合わせたもの。

吹奏楽や、管絃楽は軍楽隊によるものが多く、帝国海軍軍楽隊、戸山学校軍楽隊、東京海軍軍楽隊で20枚、これに対し、民間は三光堂音楽部（メノホン）、コロムビアオーケストラなどのレコード会社は7枚だけである。

声楽は大津賀八郎の「リゴレット」「マルタ上、下」三浦環女史「マダム・バタフライー蝶々夫人」「さくらさくら」、中山歌子に「カルメン」が2枚あった。

以上概観したところによって、このレコード資料の特徴について、おおまかに2、3の点でふれておきたい。

古いもので明治末期から昭和初期までにかけての圧倒的に多い一群とその後漸時追加されたとみられる。（一枚ごとに年代を確定したものではないから、それゆえにきわめてあいまいであるが）レコードの二群となることはほぼまちがいない。

特に前者には日露戦争—第一次世界大戦と経過する国情にみあったレコードが保存されているという点がまず指摘できよう。国粋主義の抬頭と忠義、忠君愛国の鼓吹が浪花節を通じて国民の心をとらえていったということが、なるほどとうなずけるほどの説得力を、ここにかかげるレコード目録がもっているということである。

坂井徳治氏の人となりも、選んだ事業が時代を代表するものであったと同様、その行動の規範も時流になっ

たものであったという見方もある。いっぽうに忠君愛国、他方に事業の夢を中国大陆やシベリヤ材開発に描いていたとみられているところからすれば、忠臣蔵や乃木希典伝、加藤清正などのテーマは、血をわきたたせるものがあつたかも知れない。中国大陆への進出は坂井氏の夢であつたばかりでなく、その時、日本が選り、進みはじめていた道のりであつた。氏がこれらのレコードを愛好したであろう姿をほうふつとさせるといえば物語的すぎるであろうか。紙幅もないので、坂井家小史の項で具体的にふれることにしたい。

ご遺族の話によれば、何といたっても邦楽を好み、洋楽にはあまり関心がなかったということである。音盤再生のうえからは、洋楽関係のものがわりあい聞きとりやすいものが多いのも故なしとしない。大隈重信や尾崎行雄の演説レコードの存在もその政治的立場に裏付けられる。

注1. 『音盤目録 Ⅰ』 p 390～396

注2. 明治以前は三味線と胡弓と箏の組み合わせであつた、三曲合奏（三種類の楽器で合奏）が盛んになったのは明治以降である。（吉川英士『邦楽鑑賞』 p 335～336）

注3. 吉川前掲書 p 79 及び 260。

注4. 前掲書 p 16, 39。

注5. 義太夫の本流、女流、素人の区別は、東京国立文化財研究所、前掲書によつた（p 447～451）。

注6. 『万有百科大事典、3—音楽、演劇—』 p 361 及び 368。

注7. 東京国立文化財研究所前掲書 p 356。

（3）音盤の製作会社

資料に含まれるレコード名は、表一2に示したように32種類があげられる。「日本ビクター」「日本コロムビア」「日本グラモホン」「キング」「テイチク」など、系列として現存するものの他に、その歴史をたどることも難しい群少会社もみられる。数量の少い「モモタロー」、「ブレイ」、「ヨシノ」、「フクナガ」、「松竹」といった会社がそれである。その他の項の13枚のうちには、NHK釧路放送局が放送のために使った録音盤で、「釧路の馬産」や「造産臨時列車」の運転を伝えるニュースなど、戦後まもなくの状況を伝える「Denon」というマークを貼ったものもあるが、ここでは対象から除外する。¹⁾

NIPPONOPHONE は54.7%にあたる 737枚を数え、他社製レコードを大幅にうわまわっている。日本ノホンは、日米蓄音器製造(株)（明治41年創立）と資本提携して明治43年に発足した日本蓄音器商会の発行したものである。ドイツのカールリンドストローム社の発売権を獲得し、資料にも含まれるライロホン（Lyro phone）のほか、オデオン、パーロホンという名前のレコードを国内で発売していたが、昭和2年ごろ廃止となり、のちに日本コロムビア蓄音器（株）に吸収合併されたものである。日本の音盤史上で位置づけるとすると、第三期といわれ

る第一次世界大戦前後にあたり、国内の資本がレコード企業にも進出するようになり、輸入盤にかわって国内盤が市場に現われる時期といわれている。

日本蓄音器商会（日本ノホン）の前身にあたる日米蓄音器製造から発盤されたものとしては「ユニバーサル」「ロイヤル」「アメリカン」「シンホニー」の音盤があり、以上の二社が明治末期に創立されたものである。

以下、「トオキョオ」＝東京蓄音機株式会社／大正3年、「オリエント」「メリイ」＝東洋蓄音器合資会社／大正3年、「ヒコオキ」「スヒンクス」＝帝国蓄音器商会／大正8年、「ニットオ」＝日東蓄音器株式会社／大正9年、「スタクトン」「メノホン」＝株式会社三光堂／大正12年が、このころから音盤製造を開始した会社である。このほか、日清、大阪、スタンダード、アサヒ、東亜、内外といった会社があったが、この資料には含まれていない。これらの資料の発盤年代を確定することは後述するようにたいへん難しいのだが、先行する二会社（日蓄、日米蓄）製音盤が圧倒的に多く、大正9年以降初売されたであろう、テイチク、ニットオといったレコード量が減少しているのは、これらの資料収集の下限の時期が、大正末期か昭和の初期あたりになることを示唆しているのかも知れない。群小会社からの発盤とみられるものや、あきらかに戦後の音盤と目されるものを除外しても、92.7%がこの大正期までに創立されたことが明確な会社から出ており、このことは資料収集の時期を想定する一応のメドとしてよいであろう。

資料の大半を占める日本ノホンレコードについて、音盤番号をたどったものが、表-3である。音盤番号の1～2番は芳村伊十郎の「筑摩川（上）（下）」（長唄）であり、以下9,230番にまで広がっている。判然とするように、最も集中しているのは3,000番台のレコードでこの番号台は大正7～9年ごろの発盤とみられている。8,000番～9,000番台のレコードは極く少い（約2%）うえ、6～7,000番台のものは全く欠落している。

8,000～9,000番台の16枚のうち、8枚が中村雁治郎（「心中天網島」－7枚）、芳村伊十郎ら（「樓門五三桐」－1枚）の歌舞伎劇でまとめられきわだっているが、他は、世話劇、唱歌、俗曲、浪花節、仮色（声色）男性合唱が1～2枚ずつで、このような資料の存在形態から一定の意義関連を見出すことはできない。6,000～7,000番台のレコードが全く欠如していることについては、他番号の集中度合からして100～200枚程度が存在してもおかしくはない。この資料には元来含まれていたにもか

かわらず、のちに散失したとみられるとも考えられる点については、各整理箱に各号の音盤が混在していることからすれば、多数の音盤が紛失され、この番号台のものが皆無となったとは考えにくい。しかし、資料の全容が明らかでない現在となつては、背景すらつきとめることは困難であろう。「日本ノホン」盤に関しては『日本ノホン音譜文句全集』があつて、大正6年以前のレコード題名、歌詞科目が残されており、発盤年代こそ不明だが、同社の発行したレコード名はほぼ判明する仕組みとなっている。ここでその比較を行うゆとりは残念ながらなかった。坂井徳治氏がどのようにしてレコードを入手したのかについて、坂井家や側近から知りえたことによれば、レコードを1枚1枚選んでその都度購入したというよりは、発盤される都度一括購入したと言われている。事実、購入されたレコードの使用頻度が比較的少なかったのではないと思われるほど傷みが少く、かつ広範囲の種別に及んでいることは、そこに選別のし（嗜）好をさしはさまなかったためであるとみられる反面、初期の音盤はともかくとして、最も多い3,000番台のレコードにしても半数を超えるにとどまっていることは、にわかにその断定を難しいものにしている。

片面盤の会社ごとの分布は

ビクター 2枚、コロムビア 33枚、アメリカン 5枚、メノホン 3枚、ロイヤル 64枚、グラモホン 18枚、シンフォニー 4枚、

となっている。片面盤＝輸入盤とはならないが、国内で原盤をプレスすることができない時期は、ライロホン（ドイツ）、グラモホン（イギリス）コロムビア、ビクター（アメリカ合衆国）が技術者を日本へ出張録音させ、自国から輸出されていた³⁾。ただこの資料の検討を依頼した放送文化財ライブラリーの非公式見解としては、輸入盤は含まれていないだろう、ということである。

また、「モモタロー」レコードからは、直径14cmから19cm前後の小盤が出されており、破損分をいれて10枚ある。童謡や軍歌が吹き込まれており、演奏時間のごく短いものはこのような形態で製作されたものであろう。ただ同社に関し24.5～25cmのごく一般的なS P盤の所在は確認されていないことを付記しておく。

注1. 録音機（テープレコーダー）が普及するまでの間使用されていたものでアセテートを平滑面に溶かしカッティングしたもの。

注2. 当時坂井木材合資会社の使用人だった鈴木新一（函館在住）によれば、東京からわざわざ取り寄せたもので、定期的に入手していたということであった。

注3. 東京国立文化財研究所『音盤目録 I』 p348 「邦楽レコードの変遷－義太夫節を中心として－」によれば、明治34年から同44年までに行なわれた来日出張録音は合計8回にわたるといふ。（以下次号）

（付記） 管見の及ぶところ、レコード資料の整理を手がけた事例は少く、なかなか入手できないでいた。また邦楽にも通曉していないことには分類などささる困難な作業であった。年度末近くになってNHK放送文化財ライブラリーのみなさんご指導を得る機会がえられ、東京国立文化財研究所の行なった整理事例を眼のあたりにすることができたが、その成果を本稿に役立てるほどのゆとりはなかった。それ故、多くの誤謬や独善を含むものと思っており大方のご叱正を賜りたい。